**坐　禅　会**

でんでら通信 **第百八十九号**令和三年九月

月

月

　　今月は、九月二十八日（火）十時より坐禅会を行

います。みなさんのご参加をお待ちしております。

**眼　横　鼻　直（がんのうびちょく）**

　現在の日本には禅宗と呼ばれる宗派が３つあります。

ひとつはわが宗派の臨済宗。あと二つは曹洞宗と黄檗宗です。曹洞宗は福井県にあります本山永平寺が有名です。また黄檗宗は京都府宇治市にあります本山萬福寺があります。

この永平寺を開かれた道元禅師（一二〇〇～一二五三）に有名な禅語があります。

眼は横に、鼻は直に！

一体何を意味するのでしょうか。

今から七百五十余年前、曹洞宗の開祖道元禅師は、当時の日本仏教に飽きたらず、二十四歳の時、中国（宋の時代）に留学し、天童寺如浄禅師に学ばれ、禅要を悟って二十八歳で帰国されました。その帰国後の第一声が、

「空手還郷」（くうしゅげんきょう、）

「眼横鼻直」（がんのうびちょく）

というものでした。

空手還郷とは、「経典や仏像など持ち帰らず、手ぶらで祖国日本に帰ってきました」。

眼横鼻直とは、「眼は横に鼻は縦についていることがわかった」と言われたのです。

不思議なめぐり会わせで天童如浄禅師に会う事ができ、修行させて頂きました。お陰で、そのまま、あるがまま、眼は横に、鼻は直にある事をしっかり把握する事ができ、余計な戯論にまどわされる事もなくなりました、というわけです。

眼横鼻直、読んで字の通り、目は横についており鼻は真っ直ぐについている。当たり前のことじゃないか、と誰しも思うことでしょう。あたり前の事実を、ありのままに見て、しかも、そのままである真実をうなずき取る。道元禅師でさえ四年の歳月がかかったのです。易しくて、難しい事実です。私達は果たしてすべてを、見るがまま、聞くがまま、あるがままに受け取っているでしょうか。

一休禅師（一三九四～一四八一）に面白い話があります。

　ある日、一休さんは一本の曲がりくねった松の鉢植を、人の見える家の前に置いた。

「この松をまっすぐ見えた人には褒美をあげます」と、小さな立て札を鉢植に懸けたのである。

いつの間にか、その鉢植の前に人垣ができた。誰もが曲がった松と立札を見て、まっすぐ見えないかと思案した。だが誰一人として、松の木をまっすぐ見ることはできなかった。

暮れがた、一人の旅人が通りかかった。その鉢植を見て、

「この松は本当によく曲がりくねっている」と、さらりと一言。それを聞いた一休さん、家から飛び出てきて、その旅人に褒美をあげたという。

その旅人だけが松の木をありのままに見たのである。他の人は一休さんの言葉に惑わされてしまった。褒美に目が眩み、無理に松の木をまっすぐ見ようとしたのである。（細川景一著　「枯木再び花を生ず―禅語に学ぶ生き方」参照）

さあ、どうでしょうか。私達は「眼横鼻直」のように、あるがままに受け入れているのでしょうか。他人の意見、自分の主義主張にとらわれて、本当の姿を見失っているのではないでしょうか。眼は横に、鼻は直に、じっくり味わいたい句です。

また「あたりまえ」という意味では、人間として如何に生きるか、あたりまえをあたりまえに行ずることでもあります。

コロナウィルスがまん延して日本中に大きな災いをもたらせています。今まであたりまえのように人と接していたのが、実はとても尊い、有難い日々の暮らしだったことに気づかされました。文明が発達し万病も、薬やワクチンで解決できると思い込んでいました。過去には世界中に伝染病などが流行ったが、もう医療が発達し大丈夫だと思っていませんでしたでしょうか。人々は身近に感染が拡がり、死に至るというあたりまえのことを再認識し注意を払うようになりました。

仏教や禅というと、私たちは特別なものとして構えてしまいますが、そうではなく、自分の足元をしっかりと定め、日常生活が当たり前ではなく、「おかげさまで」と感謝し、自分にできることをしっかりと愚直に行う。そこにこそ仏さまはおられるのです。